

自然環境観育成について

広島工業大学 正員 二 神 種 三

1. ええがき — 自然は分析不可能な(分解すればこわれてしまう)生命の躍動体である —

経済活動活発化によるいろいろな開発行為および生活習慣の資源多消費化(しばしば浪費化)による排出廃棄物量の増大に伴い、自然環境破壊および環境質の低下が著しく進展して、数々の環境問題が発生してきている。これらの環境問題解決のために、いろいろな環境の主要構成要素である自然の研究がいろいろとなされてきている。しかしながら、ここで考えおしてみなければならぬのは、過度に非自然化された現代生活をおこなっているものにとって、自然は把握できるのであろうかということである。自然をほんとうに解することができるものは、自然人ともいうべき自然の中にいて生活をしているものではなかろうか。たとえば、春の野山の土のかおりや、「岩ばしる垂水の上のさわらび」の生命力などと言っても、現代人はこれらの自然の息吹きも実感としてどれだけ感ぜられるだろう。ハウス栽培による野菜や果物の無季節化、およびオフィスの過度の(しばしば不必要な)冷暖房化などは、季節の変化に無感動な反自然人を大量に生産していることになる。特に、我々日本人にとって、春夏秋冬の自然の生命の躍動(リズム)感のない生活のいさつとところほどのようなものであるか。大変困ったものである。

もともと、自然は、いろいろな生命や物の有機的結合体が時間的空間的にひろがったところの分解不可能な(分解すればもとにもどすことができない)生命の躍動体であるが、この自然の生命の躍動(リズム)に畏敬の念を持つ人々の減少および、畏敬の念をもつ人々の育成に必ずしも積極的でない風潮は、今後、環境問題(自然が大幅に影響し、また影響される問題)解決において、決定的ダメージになるように思われてしかたがない。したがって、躍動する生命をもつ自然に対する畏敬の念を持てざるをえなくなるような自然環境観育成の努力が必要と思われる。

2. 東洋的自然観想法と西洋的自然観想法

明治以後、伝統的東洋的自然観想法にかわって西洋的自然観想法が大幅に取り入れられ、特に学校教育においてはほとんど西洋的自然観想法の独壇場といってもよいほどである。しかしながら、自然環境問題などのように時間的にも空間的にも大きなひろがりをもつ問題は、従来のような西洋的自然観想法ではたして解決できるであろうか。これら自然環境問題は、西洋的自然観想法よりもむしろ東洋的自然観想法に基づいた解決策がより効果的であり、大きなあやまりをおこなうのではなかろうか。

ここで、東洋的自然観想法とは、渾沌とした生命の躍動体である自然を、時間的にも空間的にも分解しないで、全体としてそのまま把握する方法である。つまり、極言すれば、東洋的自然観想法は自然を生きのまま直感(覚)的に全体的に把握する方法である。

一方、西洋的自然観想法とは、自然を個々にいろいろと分析(分解)研究し、それら個々に研究された成果を結合すれば全体の自然が把握できるだろうとしておこなう方法である。つまり、極言すれば、西洋的自然観想法は、部分的把握の積みかさねにより全体を把握しようとする方法である。

機械のような生命なき物に対しては、西洋的(分析的・死物的)自然観想法がしばしば効果的であるが、生き物である自然に対しては、この方法は決定的弱点がある。つまり、この方法を用いるならば、生き物を、生きたままでなく、無生命化してから研究しなければならないことである。

しかしながら、東洋的(直感的・生物的)自然観想法は生き物である自然を生きにまゝ把握できる強みがある。西洋的(分析的・無生物的)自然観想法でもってすれば、個々の計量化されたデータが豊富に得られて、一見非常に合理的であるが、いかに合理的にみえても、生物も無生物と同じとりあつかいをしているところはいかなともしがたい落とし穴がある。したがって、今後の環境問題解決のために、そろそろこのあたりで緊急に、東洋的自然観想法を育成する風潮を作ることが大切であると思われる。

3. 自然農法による自然環境観育成について

著者は東洋的自然観想法の育成者となるべく(まず著者自身を育成すべく)、1977年3月末より2年間(今後もずっと続ける予定であるが)、広島県佐伯郡五日市町の極楽寺山麓の休耕田を利用して自然農法をおこない、それを通じて、自然生命の躍動(リズム)感の体得につとめてきた。この2年間は、悠々なる宇宙自然の歴史(輪廻)からみれば、ほんの寸秒であるが、それでも2年間のうちに種々の動植物の栄枯盛衰をはじめ、さまざまな自然現象に遭遇し、自然はたゞ驚愕すべきドラマを持った生命の躍動体であることを日々痛感してきた。

たとえば、ひとにぎりの土といえども、それが畑にあれば、いろいろな微生物のすみかであり、作物の生命の母であるが、その土を畑からとり出し、手のひらにひろげると、湿潤な母なる大地は、乾燥した鉱物の集合でしなくなる。生命の加味する自然は不可逆的で、いったんこわすと(分解すると)もとにもどらない、それだけに大切にしなければならぬ生き物である。

自然農法による農作物の栽培を通じて農作物にとっては、空気、水、太陽、栄養分、他の生物との関係など、その作物をとりまく環境が大きく影響することが実感できた。これは、環境問題を考える場合、農作物を人間に、そして畑を人間環境に同定して考えることができ、今後の環境問題のいさつくところがいまいろいろと推察されてきた。西洋的(分析的)自然観想法の極度にいつ化した、非自然的雰囲気での現代の学校教育から開放された、自然的雰囲気での自然環境教育はできないものだろうか。万巻の書物や、非自然的雰囲気での実験研究よりも、青空のもと、また雨中での自然との一体感こそが、自然把握にはほんとうは重要ではなからうか。二宮翁夜話巻之一に「犬記録もなく書籍もなく、学ばず習はずして、明かなる道にあらざれば誠の道にあらざるなり、夫我教は書籍を尊まず、故に天地を經文ヒす」とあるが、このことは非常に意味深長である。以上が、ここ2年の間に自然農法を通じて得られた実感であり、自然農法は自然環境観育成におおいに役立つものである。

4. あとがき

環境問題解決に対し、どうしても避けられない、自然についておよび、その自然を把握する仕方について述べてきた。つまり、自然は分解不可能な(分解すればこわれてしまう)生命の躍動体であり、この生きものとしての自然を把握する方法は、従来のような西洋的(分析的・無生物的)自然観想法でなくて、東洋的(直感的・生物的)自然観想法のほうが優れているように思える。ややこしい数式や計量化されたデータをならべる前に、まず自然の中に入り、自然人的感覚でもって自然を把握する(研究する)風潮が生まれることが望まれる。自然環境観育成のために実践してきた自然農法の環境学的意義についても述べたいが、紙数の都合上、他の機会にゆずる。自然環境の医学である環境学は机に向うことよりも、むしろ自然の中で得られるべきものである。

参考文献

- 1). 福岡正信, 「自然農法-緑の哲学の理論と実践」, 時事通信社, 1976
- 2). 梁瀬義亮, 「生命の匠と生命の農を求めて」, 柏樹社, 1978
- 3). 大本富茂, 「自然観と環境問題の考察」, 広島工業大学土木工学科卒業研究論文, 1979
- 4). 吉岡 悟, 「自然農法から見た自然観」, 広島工業大学土木工学科卒業研究論文, 1979
- 5). 奈良本辰也, 中井信考校注, 「二宮尊徳, 大原出学」, 日本思想大系, 岩波書店, 1973